

日本の原初の神（御稲御倉みしねのみくら）

藤代歴史愛好会 石山博

「神」と「倉(くら)」との関わりから、神の正体を考える。

1. 「高倉下」(たかくらじ)の説話



「神社」とは神を祀る社(やしろ)のことです。『延喜式神名帳』に「~坐神社」という神社名が多く見られ、「~」は地名で、「~に坐(い)ます神の社」の意であり、当時の神社の「呼び名」であったと思われます。

「社」(やしろ)は「屋代」で、人の住む家で、「屋(や)」の「代(しろ)」、「代わり」です。この「神の社(やしろ)」が高床式の「倉」であることは周知の事実であります。

伊勢神宮の「社」は「板倉造り」だといいます。日本全国、どこの神社も板を張った高床式の「倉」で、当然ながら、板が簡単に作れなかった弥生時代には、丸太を重ね、縄で柱に縛り付けて壁にしたのだと思われます。

「~神社」(じんじゃ)と言わず、「~神宮」(じんぐう)と呼ばれる神社があります。

日本の原初の「神」は「蛇」で、「宮」(み - や)の語は、「巳(み)い様の屋」の「巳 - 屋」(み - や)から生まれ、(神聖なる神の屋)となり、(最も神聖な人)である(天皇)の(住まい)に用いられるようになったと考えられます。

「神宮」(じんぐう)の語は、「神社」と同じ構成の語として、カッコ良く音読みされるようになった平安時代に生まれ、(天皇家)にゆかりの深い「伊勢神宮」、「宇佐神宮」、「熱田神宮」など、特定の「神社」に限って用いられ、一般の「神社」の上に位置づけられています。

解説：延喜式神名帳(えんぎしき じんみょうちょう)は、延長5年(927年)にまとめられた『延喜式』の巻九・十のことで、当時「官社」に指定されていた全国の神社一覧である。出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

顔説：神宮(じんぐう)は、社号として神宮号を名乗る神社である。『日本書紀』では、伊勢神宮・石上神宮・出雲大神宮(出雲大社を指す)のみが「神宮」と記載されていた。その後、平安時代に成立した『延喜式神名帳』では、大神宮(伊勢神宮内宮)・鹿島神宮・香取神宮が「神宮」と表記されている。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

さて、『書紀』に、神武天皇が東征の途次、土地の神の悪気で眠らされる説話があります。このとき、天神(あまつ神)の「武甕雷神」が熊野の「高倉下」(たかくらじ)に、「汝の庫(くら)に剣を置くから神武に奉れ」と告げ、「高倉下」がこの剣で神武を救う事になるわけですが、小学館版『日本書紀』はこの「高倉下」の語の意味を解しかねたようで、次のようなユーモラスな解説をしています。

【クラジは文字通り「倉庫の下」の意で、校倉造りに見るような高床式の建造物は、床下に高く広い空間があり、そこに牛が立っていたという話もある】(第 1 巻 221 頁)

しかし「高倉下」は次のように考えられます。武甕雷神は「高倉下」に汝の「庫(くら)」と言うのだから「高倉下」(たかくら - じ)は「倉の主」である。そして、「し、じ」を語根に持つ言葉には、「し(氏、師)」、(人の丁寧語)。大分県宇佐では、

(あの人)を「あん - し」と言う。(大分県の方言 HP より)

「うじ(氏)」

「なんじ(汝)」、な(汝)のし。

「ぬし(主)」

「あるじ(主)」

があり、

「たかくら - じ」の「じ」は、

倭語の「し」と共通し、(人、尊敬すべき人、あるじ、主)を意味していると考えられます。

さらに、『日本書紀』神代紀に次の例があります。

「ぬし(主)」

(天之御中主尊)、(稲田宮主神)、(大国主神)、(大物主神)、(事代主神)

「ち」

(句句廻馳) くく - の - ち

(野槌)の - つ - ち

(國狭槌尊) くにのさ - つ - ち

(雷)いか - つ - ち

(軻遇突智) かぐ - つ - ち

(武甕槌神) たけみか - つ - ち

ここでの「の」と「つ」は、連体格助詞です。

「ぢ」

(可美葦牙彦舅尊) うましあしかびひこ - ぢ

(大戸之道尊) おおとの - ぢ

(大富道尊) おとま - ぢ

「むち(貴)」(大日靈貴) おおひるめ - 無知

(道主貴) ちぬしの - むち

(大己貴) おおな - むち

以上を見れば、

倭語の「し、じ、ぬし、ち、ぢ、むち」はズバリ、漢字の「主」の意味で用いられており、「~の主」は、「~の神」をも意味したと考えられます。

また、「じ」と、「ぢ」は、発音上区別することは困難であり、であれば、意味も同一であったと思われます。

『書紀』は「高倉 - 下」の「下」の漢字に「註」を付して「じ」と読ませています(岩波版『日本書紀』上巻 206 頁)。

これは、この説話が「たかくら - じ」の音声で伝わっており、『書紀』の編者が、(熊野の身分の低い人)と考えて、「下」の漢字を当てたためと考えられます。

しかし、漢字の「下」の字には、「じ」の音も訓もないので、「じ」と読ませるのは無理があります。そして、この物語の主題は、「たかくらじ」が、「天神」に協力して「神武」を助け、東征を成功に導く処にあり、身分の低い人として扱う理由はありません。

『書紀』は「たかくらじ」を、(その土地の神)、すなわち(地祇)としてこそ扱うべきだったのです。

このように、「たかくら - じ」の「じ」は「神」に対する(尊称)と見るべきであり、また「高倉 - じ」は(倉の主)なのだから、右の古代の用例からするなら、(最もふさわしい漢字)は「主」であり、「高倉-主」とこそ、書くべきだったのではないのでしょうか。

そうすると、『書紀』仲哀紀に出て来る「岡の水門の神」の「大倉主」が連想されます。

「大倉主」は通常「おおくら - ぬし」と読まれているが、こちらも古代には「大倉 - じ」と称されていたのに対し、(尊称)の「じ」に、「主」の漢字が当てられたのではないかと考えられます。

この「岡の水門」から遠賀川を遡った処にある「剣神社」に祀る神を「倉師(くらじ)大明神」といいます。

この「くら - じ」の意味も「倉の主」であり、「~大明神」は中世の(尊称)ですので、古代においては、「高」あるいは、「大」の(美称)を付して、「高 - 庫 - 主」、あるいは、「大 - 倉 - 主」と表記されていたと考えられます。

このように分析してみれば、「じ」に「下」の漢字を当てたのは、『書紀』の編者の明らかな〔失策〕であったと言わざるを得ません。

以上、古代から「神の社」は「倉」であり、「神」は「倉の主(くら - ぬし、くら - じ)」とも言われたのでありました。

解説：連体助詞は、体言と体言を関係づける助詞である。連体格助詞とも言う。語と語の関係をあらわすという意味では格助詞の一種である。

①：の 連体助詞【主な機能】体言と体言を繋げ、前の語の内容を後の語に付け加えることで、後の語の内容を限定するはたらきをもつ。例えば「吉野の山」の「の」は、「吉野」という場所を指定することで「山」を限定するはたらきをするのである。

「の」は他にも様々な機能を発達させ、「つ」「が」に比べ用途は極めて広い。

②：つ 連体助詞【機能】体言と体言を繋げ、「の」と同様のはたらきをするが、主として上代に用いられた助詞で、用例は限定される。場所・位置・時などを示す用法がほとんどである。天つ神 国つ神 内つ宮 外とつ宮 上つ瀬 下つ瀬 昼つ方 夕つ方 先つ年上に見るように対語をもつケースが多いが、「天つ風」のように対語をもたない語もある。現在では殆ど使われなくなり、「まつげ(目つ毛)」「おとつい(遠をちつ日)」などに化石的に残っているばかりである。 出典：フリー百科事典『ウィキペディア』

2. 「くら」の〔意味〕

では、倭語「くら」の〔意味〕はというと、大きく分けて、三つあります。

i. 〔原初の意味〕「倉・蔵・庫」の漢字が当てられ、この漢字の訓が倭語でいう「くら」となる)

ii. 〔i から派生〕「坐、座」(大事なものを置く処)、(貴人、神の座る処)

iii. 〔ii から派生〕「鞍」(馬の背に設けられた貴人の座る処)

続いて「くら」の派生語を見ますと、

「ま(真)+くら」(人の最も大事な処)、「頭」

「まくら」「枕」、(頭を置く処)

「まくらへ」「頭辺」(頭の辺り)

「いわくら」「磐座・磐倉・岩倉」(神の依り代である自然石の岩)

「みてぐら」「幣、幣帛」(御手座)、(手に持って神に奉納するものの総称)

「みたえくら」「御栲座」(栲で作るみてくら)(みたえくら)

「さくら」「さ(早)+くら」(初々しい神の依り代、穀霊、桜)

「たかみくら」「高御座」(天皇の位)、(天皇が即位式で座る褥、椅子)

「くらい」「位」「くら(座)+ ゐ(居)」(座席の序列、身分、階級)

「くらかみ」「座長」(上席、上席の人)

「くらしり」「下風」(下座、下座の人)

「くらい」「暗い」「くら」+「い」(形容詞を作る接尾語)、(倉の中は暗い)

「まっくら」(真暗)、

「くらがり」(暗がり)、

「くらやみ」(暗闇)

「くらおかみ」「闇竈」(暗い谷の神)

「くらやまつみ」「闇山祇」(山の神)

「くらみつは」「闇罔象」(山の水の神)

「くろ」「黒」(倉の中を色で言えば「くろ」)

「くらす」「暗らす」(心を暗くする)

「くらす」「暮らす」、(暗くなるまで時間を過ごす)、(一日を過ごす)、(月日を送る)

「くれる」「暮れる」(日が暮れる)(途方に暮れる、~にくれる)

「くれ」「呉」(日が暮れる処にある国)

このように、倭語の「くら」の派生語は全て(倉)の意味から派生していると考えられ、同時に、「くら」の語は(大事な)、(高貴な)、(神聖な)のニュアンスを併せ持つことがわかりました。

参考：「からすんまくら」という言葉を、聞いたことありますか？ 伊万里ではなじみの深い言葉で「黒曜石」のことを指します。腰岳から産出され、旧石器時代には、矢じりやナイフにして使われたという、歴史ある石です。出典：佐賀新聞 LIVE2021.3.16 より
転じて「最も大事な処」「貴人・神の座る処」となったと思われます。

3. 「くら」の「語源」

では、倭語「くら」の「語源」について考えます。

倭語の「ほら」に注目しています。何となれば、人工の「くら」(倉)は入り口の他は、床も、天井も、四周の壁も全て塞がっていて、自然の(山の洞穴)や、(木の洞)を言う「ほら」の形状と同じだからです。

岩波版日本古典文学大系『日本書紀』によれば、古朝鮮語 hol、古満州語 holo に(山の谷)の意味があったという(上巻 609 頁)。

とすれば、(山)と(暗い)の二つの共通キーにより、(山の谷)から(山の洞穴)の意味が派生したことは十分に考えられます。それは大陸側であったかもしれないし、倭語の「ほら」として受け入れた日本側であったかもしれない。

そして日本語の h 音は、〔はね、ひと、ふね、へそ、ほね〕のように、口先で発する弱々しい音ですが、ヨーロッパの h 音は、〔hat、hit、heavy、host〕のように強い喉音(こうおん)です。

中国大陆の h 音も同様で、日本人には中国語の h 音は、日本語の弱々しい h 音より、喉音(こうおん)の k 音に近いと聞こえたようで、h 音の漢字は全て日本語では k 音となって定着しています。

海 hai → カイ、漢 han → カン、韓 han → カン、汗 han → カン、

好 hao → コウ、行 hang → コウ、花 hua → カ、火 huo → カ 等

とすれば、大陸の hol、holo が h 音の「ほら」として倭語の(自然の洞窟、木の洞)の意で定着した一方で、k 音の「くら」としても、倭語の(人工の倉)の意で定着したと考えることができます。

以上の〔言葉の意味〕と〔日本人の発音の特性〕の分析からして、倭語の「くら(倉)」と「ほら(洞)」は、古朝鮮語 hol、古満州語 holo に由来する〔古い外来語〕であり、〔同根の語〕であると考えられるのです。

解説：喉音(こうおん)とは、口の奥の方で調音する子音全般の古い名称。あいまいな用語であるため、現在の音声学では使わず、実際の調音位置によって舌背音、舌根音、声門音のように呼びわける。出典：フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』



4. 「くら(倉)」と「ほら(洞)」の説話

さらに『日本書紀』に、倭語の「くら(倉)」と「ほら(洞)」が〔同根の語〕であることを示す説話があります。

【「岡の水門」の男神の「大倉主」(おほくらぬし)と女神の「菟夫羅媛」(つぶらひめ)が、「岡の水門」で仲哀天皇に意地悪して船を動かなくさせる】(上記岩波版『日本書紀』上 324 頁)。しかし「岡の水門」は水深があって良港とされているから、この神話はなじみません。

この「岡の水門」の東に、「洞(ほら)の海」、現在の「洞海湾（どうかいわん）上図は、かつての洞海湾」があり「洞の海」は、外海の「響灘」と(狭い水道)の「と(戸)」で繋がる袋状の海で、正に、(洞穴)のような形状をした大きな内海です。そしてこの「洞の海」は、細い「江川」という川で「岡の水門」に繋がっていて、明治時代まで、小舟なら外海の「響灘」から「岡の水門」まで通り抜けることが出来たといえます。

『日本書紀』の説話では、神功皇后はこの「洞の海」の航路を取り、外海から「岡の水門」を目指す仲哀天皇と、「岡の水門」で落ち合う予定であったが、しかし、この「洞の海」は遠浅の海で、神功皇后の船も恐らく大きな船であったので、干潮で船底が海底について動かなくなったという。

以上の説話から判断すれば、『書紀』で≪岡の水門の神≫とされている男神の「大倉主」と女神の「菟夫羅媛」は、実は、≪洞の海の神≫だったのであり、「洞の海」における干潮時に船が海底について動かなくなる現象を、太古から、「洞の海の神の意地悪」と言い伝えてきたものと思われます。

解説：洞海湾（どうかいわん）について

「つくしなる 大渡川 大方は 我一人のみ 渡る浮世か」（古今六帖）
と紀貫之の古歌がある。

この歌からもうかがえるように洞海湾「古名、洞海（くきのうみ）」はその昔、川状をなして江川によって遠賀川河口に通じていた。若松は離島であるので、戸畑、八幡との交通はすべて船で行われていた。外海である玄海・響の両灘は風波がひどいため、神功皇后も洞海湾を通航され、豊臣秀吉の軍船もここを通過して芦屋に出ている。

かつての洞海湾は東西 20km、南北が 2km という非常に細長い湾で水深は浅いところで 1.5m しかなく、干潮時には出船、入船が困難であった。

（出典：洞海湾の歴史 - 北九州市 HP より）

ところが『書紀』の時代には「岡の水門」の首長が、「洞の海」を勢力下に置いて、この男女の二神も≪岡の水門の神≫として取り込み「岡湊神社」と、8km 西の岡の上にある「高倉神社」に祀っていた。そこで『書紀』の編者はこの元≪洞の海の神≫の意地悪の話を「岡の水門」における話として記したと考えられます。

しかし、そもそも男神の「大倉主」の≪倉の主≫と言う≪名前≫自体、「岡の水門」の主としてはなじまず、≪洞の海の主≫にこそふさわしいと思います。

さらに相棒の女神の「つぶら媛」の名前の(つぶら)も≪洞の海の形状≫をいうと考えることが出来ます。この内海が海と繋がる戸(と)の端(はた)の地が「戸畑(とばた)」で、「洞の海」は、この入口の「とばた(戸畑)」の他は、全て≪つぶっている=つむっている≫内海だからです。一方に≪入口≫があって、片方が≪つぶっている=つむっている≫巻貝を、「かた - つぶり=かた - つむり」と言います。

この「つぶる、tu-bu-ru」と、「つむる、tu-mu-ru」の語も、「b 音と m 音が交代した同じ意味の倭語」です。このように分析してみれば、「大倉主」と「菟夫羅媛」が「洞の海」の神であることは疑問の余地がありません。

もっとも、岩波版『日本書紀』はこうした解釈はとりません。また、≪「菟夫羅媛」の言葉の由来≫は、≪語義≫に触れていません。

小学館版『書紀』も同様に、「大倉主・菟夫羅媛」の二神を「岡の水門」の神であるとし、「地域を主催する塞神(さえの神)である」とするが、これでは説明になっていません。「大倉主・菟夫羅媛」の名義については≪不詳≫として触れていません(1 巻 407 頁)。

以上、『日本書紀』のこの神話を見ても、≪洞(ほら)の海の主である神≫は、≪倉(くら)の主≫の名を持っており、「くら(倉)」と、「ほら(洞)」が〔同根の語〕であることを裏付けています。なお、「倉」は「大きい倉」、「高い倉」が、(立派な倉)とされ、「大」と「高」が「倉」の美称となり、この美称と「~主」の尊称を付した「大倉 - 主」、「高倉 - 主」が≪神≫の名とされたのです。

遠賀川河口にある「岡湊神社」は「大倉主社」とも言い、8km 西の岡の上にある「高倉神社」の外宮、すなわち、「高倉下宮」とも言います。

解説：サエノカミ(塞の神)，ドウロクジン(道陸神)，フナドガミ(岐神)などとも呼ばれ、村の境域に置かれて外部から侵入する邪霊，悪鬼，疫神などをさえぎったり，はねかえそうとする民俗神である。陰陽石や丸石などの自然石をまつたものから，男女二神の結び合う姿を彫り込んだもの(双体道祖神)まで，この神の表徴は多様である。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

5. 「倉 - 主」(くら - ぬし、くら - じ)

では、日本の≪神≫は、何故、「社(やしろ)」である「倉(くら)」に祀られ、「倉 - 主」(くら - ぬし、くら - じ)が神の名になるのでしょうか。

吉野裕子氏が結論し、永井正範氏が『神奈備』で結論したように、日本の≪神≫が「蛇」ならば、「蛇」、すなわち神は、何故、高床式の「倉(くら)」に祀られるのでしょうか。



御稲御倉

伊勢神宮には、境内社である「御稲御倉(みしねみくら)」があります。伊勢神宮には、末尾に「~神社」と付けず、「~の御倉」で終わる神社が伝わっており、他に、「調御倉」(つき - の御倉)、「御塩御倉」(みしほ - の御倉)・「舗設御倉」(しつらひ - の御倉)・「由貴御倉」(ゆき - の御倉)がある。「倉(くら)」そのものが(神の社)であり、美称の「御(み)」を付けた「御倉(みくら)」

であれば、「神社」の語を重ねるまでもないからだと考えられます。

「御稲御倉」の「御稲」は(みしね)と読見ますが、三省堂『詳説古語辞典』は「しね」を「稲の古語」としてはいますが、≪単独の「稲」の語≫を「しね」と呼ぶ例を聞きません。「稲(いね)」に美称の「御(み)」を付ければ、(み - いね、mi-i-ne)と二重母音になります。

上代は、この二重母音を徹底避け、そして、「み - いね、mi-i-ne」の場合、二つ目の母音に子音の「s」を被せて、(mi-si-ne、みしね)と発音し、二重母音となるのを避けたようです。これは〔上代の発音のルール〕であって、「稲」を言う「しね」の古語があった訳ではないことを示しています。

二重母音になるとき、二つ目の母音に子音の「s」を被せて二重母音を避ける〔上代の発音のルール〕としては、霧雨(きりあめ→きりさめ)、小雨(こあめ→こさめ)、春雨(はるあめ→はるさめ)、氷雨(ひあめ→ひさめ)、村雨(むらあめ→むらさめ)があります。

伊勢神宮で伝えてきた「御稲(みしね)」の語と発音は、こうした二重母音を避けるという〔上代の発音ルール〕を現代に伝えていたと思われます。これは「みしね - のみくら(御稲御倉)」の言葉の淵源の古いことを示していて、この「稲」の語を辿るうち、祝詞(のりと)に「荒稲(あらしね)」、「和稲(にぎしね)」とあるのも、これもまた、全く同じ〔上代の発音ルール〕に拠っています。

解説：荒稲（あらしね）名』 粳(もみ)のままの米の意か。もみごめ。

⇨和稲(にぎしね)後世は「にぎしね」もみをすりとった稲。にこしね。

出典：荒稲「精選版 日本国語大辞典の解説」、和稲「デジタル大辞泉の解説」

「御稲御倉」は、伊勢神宮の境内社 30 社のうち、序列 6 位の「神社」で、神宮の神田で「抜穂(ぬひぼ)」として刈り取った「稲穂」を保管しておき、この「稲穂」を取り出して、一年を通して、天照大神に捧げる神酒・御餅・御飯(おんいひ)を作るといいます。ということは、「御稲」が、高床式の「御倉」である「御稲御倉」に置かれる、すなわち、(祀られる)主役だったということであり、これは、「御稲」こそが<<神>>そのものであったと言って良いのではないのでしょうか。

つまり、「御稲御倉」は、古代の〔稲を廻る人の営み〕を伝えていたのであり、採集生活から水稻を栽培する弥生時代に移ると、秋に収穫された「稲穂」は翌年の秋までの<<命を繋ぐ糧>>となり、この「稲穂」こそが<<最も価値ある物>>、<<最大の宝>>となり、権力者の<<権力の源泉>>となったと考えられます。

この〔稲を廻る人の営み〕は、弥生時代における全国の村に共通したと思われ、弥生時代の<<稲の穂刈り>>を伝える「抜穂(ぬひぼ)の祭り」は、伊勢神宮の神田に伝えられ、同じ様に、この祭りを伝える神社は全国に多い。弥生時代には、<<稲の穂刈り>>こそが、最も重要で、神聖で、喜ばしい行事であったことが伺われます。こうして秋に収穫され、権力者の許に集められた「稲穂」は、翌年の収穫まで高床式の「くら(倉)」に収められ、<<神>>そのものとして厳重に保管されたと考えられます。

ところがこの<<稲穂の神>>には、「ネズミ」という困った敵がいて、保管する間中、襲われたと思われます。その「ネズミ」の天敵が「蛇」であります。弥生時代の「くら」は、構造上、隙間が多く、「ネズミ」と「蛇」は結構自由に出入りできたと思われますし「く

ら」に住みつくこともあったと思われます。床下の柱に設けられたネズミ返しは「蛇」には苦にならないし、「蛇」の住みついた「くら」には、「ネズミ」は入れなかった。縄文時代、山で生きるための糧を探す時、最大の畏怖の対象であった「蛇」は、稲作経済の弥生時代になると男根に重ねられて〔豊穰を齎す種神〕とされ、それだけでなく、人が生きるための敵である「ネズミ」の敵として人の最大の味方となり、《神である御稻(みしね)》を《守護する神》となったのではないかと考えられます。

吉野裕子氏は、《日本の原初の神》を「蛇」と考えた。しかし、「蛇」は《守護神》であり、その《守護神》に護られる《本来の神》があった、それが「倉」に保管される《御稻の神》であった事になります。この《守護神》の《蛇》と、《本来の神》である《御稻の神》が、「御稻御倉」、すなわち「倉」で繋がっていたのです。

解説：吉野裕子（よしの ひろこ、1916年-2008年4月18日）は、日本の民俗学者。東京都出身。1942年『風のさそひ』を上梓、専業主婦となるが、日本舞踊を習っていたことから民俗学に関心をもち、1954年津田塾大学卒業、1970年著書『扇』を刊行、1977年「陰陽五行思想から見た日本の祭り」により筑波大学（東京教育大学）文学博士号取得。在野の学者として著書多数。蛇 日本の蛇信仰 法政大学出版局 1979 のち講談社学術文庫や全集全12巻がある。出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

6. 忘れ去られた《原初の神》

ところが、生産力が高まり、社会が発展して来ると、社会には様々な《宝》が溢れ、余りに日常的なものとなった《コメ》はいつの間にか《神》の座から降ろされて、《神》に供される供物、すなわち《神饌》(しんせん)としての地位に置かれることになった。また人知が進んで、《様々な人格を持った神々の体系》が作り上げられ、『記紀』には、

《五穀の起源神》として、

「おお - げ - つ - 媛の神」 (『古事記』にのみ記される神)

「大気都比売」他の表記がある(岩波版『古事記』57,59,85,111頁)、

「うけ - もち - の神」

(『日本書紀』にのみ記される神)

「保食神」(巻1第5段第11の一書、岩波版『書紀』上巻101頁)

が記される。

そしてこの《五穀を司る神》として、

「うかの - みたま - の神」 「宇迦能御魂神」(岩波版『記』89頁)

「倉稻魂命」(『紀』巻1第5段第6の一書、岩波版『紀』上巻90頁)

「とよ-うけ-びめ-の神」 「豊宇気毘賣神」(『記』61頁)、

「登由宇気神」(『記』129頁)

「豊受大神」、

「止由気大神」(伊勢神宮外宮『止由気宮儀式帳』)

が記されている。

以上の神名に見られる「うか」、「うけ」、「け」、「げ」は(穀物、食物)を言う同じ意味の言葉と考えられ、ここに挙げた神々は、平安時代から鎌倉時代にかけて、「稻荷神(いなり神)」、「(稻成り神)」として同一視されて行きます。

すなわち、『記紀』の段階においては、既に、《日本の神》は《様々な人格を持つ神》に移行しており、弥生の時代の《原初の神》は忘れ去られていると考えられます。

伊勢神宮は、「御稻御倉」を現代に伝え、神宮を本宗とする「神社本庁」は、「御稻御倉」に祀る神を、《御稻御倉の守護神》とする。ここにも「御稻」自体を《神》とする認識は無く、同時に《御稻御倉の守護神》を、「蛇」の如き(忌むべきもの)とする認識も無いようです。だから、「神社本庁」の言う《御稻御倉の守護神》とは、《その役割を担うという人格を持つ神》がいると認識されているという事なのでしょう。

「御稻御倉」の《伝統》を伝える伊勢神宮においても、はるか遠い弥生時代には「稲穂」を《神》と崇めたことも、この「稲穂」を天敵の「ネズミ」から守ってくれる「蛇」を《守護神》と仰いだことも、「御稻御倉」自体がこうした《日本の原初の神を伝える名残り》であることも、みんな忘れ去られたと考えられます。

《神》を祀る日本全国の神社においてもまた、『記紀』の記す《人格神》を祭神と仰ぐばかりで、《本来の原初の日本の神》は忘れ去られているということになります。

解説：古い神名について

うか：「宇迦」は「ウケ」（食物）の古形で、特に稲霊を表す。

うけ：古語で、食物の意。ウカの転用とされる。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

け：古い神名に「け」の神様があります。オバケ、モノノケや『東日流外三郡誌』に見える津保化族のツボケも「け」の神様と思われます。「ボケ」とかの罵倒語もこの「け」の神名に由来するのではないのでしょうか。すなわち、侵略された側の古い神々が差別され、罵倒語として侵略者の側で使用されるというケースです。もしかすると、ホトケという言葉も仏教伝来時に異国の「陰神」という意味で日本列島側で付けられた名称かもしれません。 出典：古層の神名「ち」「け」「そ」「くい」「くま」より

7. 最後に

しかし、日本全国の農村で、自然と共に生き、生業として《稲》を作って暮らして来た人々は、「天照大御神」を想う訳ではなく、「うかのみたまの神」や、「とようけびめの神」を想う訳でもなく、ただ、《習慣》と《伝統》に従って、正月には、秋に収穫した「稲」で、「御-鏡」(お-かがみ)を作り続けて来ました。これを家の中で最も神聖な場所である床の間に《神》として祀り、秋の収穫でこの「お-かがみ」を作ることの出来たことを《神》に感謝し、来るべき新たな年もまた実り豊かであることを祈り、この「お-かがみ」を家族一同で分けて食し、《神》にあやかってきました。

ここでは、『記紀』が記す《人工の神々》も、村の神社が祀る《『記紀』の人格神》も意識されることはありません。ただ自然とその恵みを《神》に感謝する《心》があるだけで、その《心》が、弥生時代以来、日本人が受け継いで来た真の《神》を今に伝えていたという事になります。《真の人の歴史》を伝えて来たのは、『記紀』の歴史書ではなく、神社でもなく、自然と共に生きて来た《日本人の心》そのものだったと言えるのではないのでしょうか。

伊勢神宮が伝える「御稻御倉」によって《日本の本来の神さま》は「稲穂」であり、「蛇」はその《守護神》であることを知った今、以下のように言うことができるでしょう。

一つ目：「注連縄」が、「蛇」の交尾を表すについてはその通りで、それを「稲わら」で作るところが《本来の神である稲》と、《その守護神である蛇》の密接な関係を表している。

二つ目：「御-鏡」(おかがみ)もまた、同様に、その素材自体が《本来の神である稲》によって作られ、その形は《守護神》である「蛇のとぐろ」を模したのです。そして「お-かがみ」の「かが」は「かか」、すなわち古い外来語の「蛇」であり、「み」は「蛇」を意味する最も古い倭語です。そして庶民が稲で作った餅の「かがみ」こそ、日本の原初の《神》であり、「かみ」の語の語源となったと考えられます。

三つ目：「蛇のとぐろ山」を「神奈備山」と崇めるについては、弥生時代の人達に拠って、この山の界限が、《守護神》に守られる良き処と認識されたという事になります。

解説：神奈備（かむなび・かんなび・かみなび）とは、神が「鎮座する」または「隠れ住まう」山や森の神域や、神籬（ひもろぎ）・磐座（いわくら）となる森林や神木（しんぼく）や鎮守の森や神体山を、また特徴的な岩（夫婦岩）や滝（那智滝）がある神域などをさす。神籬と磐座の総称でもある。依り代となる森林や岩などが無い「神奈備野」もある。出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

(了)

参考資料

永井正範：「日本の神様の正体」より